

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

普遍性を求める時代だからこそ、経年の趣を。

岩佐 昌昭 島根／陶芸家



スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。「進め！電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大学副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。「くまモン」の生みの親でもある。



1月24日、プレゼンテーションにて

本プロジェクトは2016年、プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意匠研究所）らをサポートメンバーに発足。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への指定やロックフェラー家主催のチャリティイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。

3年目となった今回は、全国47都道府県から計50名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの制作に取り組んだ。

1月24日、東京ミッドタウン日比谷で行われた発表会では、国内外の百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイナー関係者などに向けて自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：LEXUS）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援



プレゼンテーションの様子

大きなチャンスを手にした。また当日は、2019年の新たな取り組みとして、全国の匠と、世界的クリエイター（コラボレーター）が、新たなプロダクトを制作するコラボレーションプログラムを発表。コラボレーターである隈研吾氏（建築家）、廣川玉枝氏（SOMARTAクリエイティブディレクター）、森永邦彦氏（ANREALAGE / 代表取締役社長・デザイナー）、辰野しずか氏（クリエイティブディレクター／プロダクトデザイナー）が登場し、想いを語った。2019年秋頃には、完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを合わせて発表。プロジェクトも一歩一歩進化している。



商談風景

「伝統を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。島根県選出の匠、陶芸家の岩佐昌昭さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

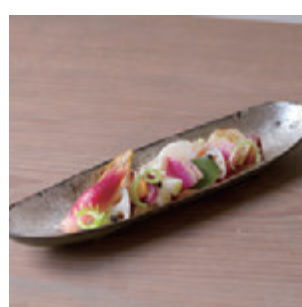
時を感じる器

半年間の制作期間を経て完成したプロダクト「枯銀」シリーズは、「時を重ねる器」をコンセプトに仕上げられた。岩佐昌昭さんが追及する「陶胎漆器」を応用した技術と、出雲地方ゆかりの青銅器の風合いにより、まさに長い年月を経たかのようなデザインを表現している。

陶胎漆器とは、陶器（磁器）の上に釉薬ではなく漆を塗る技法。縄文時代から用いられていたとされ、通常の焼き物では出せない表現ができることが魅力という。

枯銀シリーズには更に、陶胎漆器制作の過程で器に銀箔を施し、あえてそれを削ることで経年変化を思わせる風合いを加えている。高級感があり落ち着いた銀色はほゞよい存在感を放ち、和の渋さ、洋の華やかさも問わず、添えられた料理や菓子を映えさせる。

器の外側は、青銅釉を施して、その銅が錆びることによって生じる緑青色に彩った。緑青色は出雲地方で出土した青銅器を見てインスピレーションを受けたことから、プロダクトに「古代出雲」、「青



独特な落ち着いた色味で料理を映えさせる

陶と漆の共演に古代ロマンを感じる。

陶芸家の一方で、僧侶の一面も持つ岩佐昌昭さんは、出雲市西郷町の徳雲寺の住職も務める。青銅器や古墳など、古代ロマンを感じさせる出雲の地で日々、山あいの静かな本堂に隣接する工房で、作陶に励んでいる。

愛媛県出身で、23歳の時に「自身の手で何かを作り上げる仕事をした」と、陶芸の道に進むことを決意。備前焼（岡山県）の教育施設施設や窯元で勤務した後、滋賀県に移って信楽焼の窯元で腕を磨いた後、2011年に山陰市に移住した。

備前、信楽での修行中、漆に金粉を施す「金継ぎ」に興味を持ったことをきっかけに、それをさらに発展させて陶器と漆を融合した「陶胎漆器」を独自に追求。陶器でもない漆器でもない、新しい作品を生み出したいと日々、創作活動に取り組んでいる。



エリアコンサルティングの様子



岩佐 昌昭
島根／陶芸家

1979年愛媛県生まれ。アパレル業界で勤務した後、23歳で陶芸の世界に入り、備前と信楽で修業をする。修業中に漆芸にも魅力を感じ、陶器に漆を施す陶胎漆器の製作も並行して始める。2011年に島根県出雲市に移住し、独立。第36回田部美術館大賞「茶の湯の造形展」奨励賞、第12回現代茶陶展TOKI織部奨励賞受賞。

LEXUS
NEW
TAKUMI
PROJECT



岩佐さんの作業風景

プロジェクトへは「販路を広げる絶好の機会」と、参加を決めた。地元では展示会への出品のほか、個展なども行うが、地元以外でも作品を広く知ってほしいという想いを胸に抱いていた。

岩佐さんは「これで終わりではなく、プロジェクトをステップにさらに多くの人に作品、技術を知ってもらいたい」と意気込んだ。

プロジェクト開始当初は、同じく出雲地方ゆかりの古代銅鏡に着想を得て、緑青色のプレートの回りを、箔で縁取った一枚ものの八角プレートの制作を予定していた。しかし、昨年10月に山陰市の工房で行われたエリア・コンサルティングでサポートメンバーの川又俊明氏による「もっ」と銀箔の陶胎漆器を前面に表現した方がよい」というアドバイスを経て、より陶胎漆器の技法が明確なデザインを採り入れた。

また、器の利用法的確信は変わるよう、一点ものではなく、サイズや形も様々なシリーズへと変更。料亭やレストランでの「料理を魅せる」場面のほか、お店やギャラリーでの花器やオブジェとしてなど、活躍の場がより広がった、実用的なプロダクトへと昇華させた。

銀箔は剥がれや傷が考慮され、器の表面に施されることは珍しく、完成には高い難易度が求められた。様々な想いや試行錯誤を経て出来上がった枯銀シリーズについて、岩佐さんは「シンプルなものや普遍的であることに価値を見出されがちな現代だからこそ、枯銀の魅力である長い年月を経たような風合いと、経年変化していく様子を楽しんでほしい」と話した。



完成プロダクト「枯銀」シリーズ